

国語

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分があります）。

中学二年生の「僕」(夏見)は、言葉を言い間違えたり、文字を読み間違えたりする特性を持っている。ある日、「僕」は足が速いからという理由で、体育大会の二〇〇メートル走とクラス対抗リレーの選手に選ばれる。

一時間目から学級活動で、体育大会の出場種目決めだった。各自で希望を決めておくようにとクラス代表が先週言っていたがすっかり忘れていた。

「やっぱり、*1夏見親方に*2結びの一番、お願いしないとな」

*3山上が発言して、みんなが笑う。僕のほうをいっせいに見る。だから親方というのは引退しているんだから結びの一番には出ないだろう。言いたかったが言えなかった。

クラス代表のメガネの女子が、黒板の前で書記兼司会をしている。

「じゃあ、クラス対抗リレーは、この順番でいいですか？」

「いいです」

山上だけが大きな声で答え、ぱらぱらと拍手が聞こえた。それで決定したらしい。

黒板にある僕の名前は、クラス対抗リレー、六人の走者中六番目に書かれている。つまりアンカーだ。

「じゃあ、次、一〇〇〇メートル走ですが」

次の種目の話になってしまった。①僕は手をあげて辞退しようと思っていたのに。

去年僕は、短距離走とリレーで一位になった。リレーは最下位でバトンをもらってからアンカーの僕が五人抜きでゴールしてしまい、自分でも驚いた。みんなはそれを覚えているのだろう。クラス中に期待されている。

それが僕にとってはプレッシャーだ。僕は誰よりもプレッシャーに弱いのだ。去年は期待されていないから走ただけで、きっと今年はいまうまいかなと思う。バトンの受け取りで失敗したり、靴が脱げたり、転んだり、きっとそんな失敗をする。そしてまた笑われる。ふざけていると思われ、あとでクラスの女子たちに睨まれる。「真面目にやってよ、夏見君」と怖い声で叱られ、僕の失敗の記憶がまたひとつ増える。

そのことが頭から離れなくなった。体育大会は二週間後だ。その間、ずっと考えていなくてはならない。プレッシャーとの闘いが続くのだ。

(中略)

その日の放課後から早々に体育大会の練習がはじまった。ジャージに着替えて校庭に行くと、中島まほりが立っていた。

「あ、中島さん、リレーだっけ？」

気軽に声をかけられた。

「うん」

小さな声だが、初めて声を聞いた。普通の女の子の声だ。

「何番目？」

中島まほりは今度は声を出さず、指を五本たててこちらに見せた。僕は中島まほりからバトンを受け取るらしい。

(中略)

35

「大丈夫だよ。僕、手を思いっきりひらくから、そこにぶつけるようにバトン、押しつけて。僕、ぜったいつかむから」
「うん」

中島まほりが笑った。中島まほりは意外と僕の頭の事情を知っていきそうな気がする。彼女になら知られてもまったくいやじゃない。ふとそのとき、中島まほりに*4ジャイアントババのことを訊いてもばかにされないかもしれないと思った。

「ねえ、訊きたいことがひとつあるんだけど、いい？」

中島まほりは、変わらぬ丸い目で頷き、「いいよ」と言っている。

30

25

20

15

10

5

40

「あのね、ジャイアントパンダって知ってる？」

うん、とこつくりまた頷いた。

「どんな動物？」

え？ と中島まほりは訊き返す。

「僕、知らないんだ。ジャイアント……」

そう声に出してから、ジャイアントババと言おうとして、ジャイアントパンダと言ってしまったかもしれない気がついた。何を言ってしまったのだ僕は。パンダなら誰だって知っているだろう。パンダのことを知らないなんて言ってしまった。②またこんな言い間違いだ。

45

「僕、今、ジャイアントパンダって言った？」

「ごまかそうとも考えたけど、正直な気持ちのほうがA口をついた。彼女の目がふつとゆるんで細くなった。」

50

「あのね、僕、ジャイアントババって言おうとしたんだけど、ジャイアントパンダって言っちゃった。似てるよね」

中島まほりは、手を口にあてて笑った。すぐかわいらしい目になった。両はしが垂れ下がった目だ。耳も赤くなった。僕もつられて赤くなって笑った。

55

(中略)

放課後のリレー練習は毎日順調に進んでいる。バトンの受け渡しを中心に繰り返し練習をしたので、かなり六人の息が合ってきた。男子三人、女子三人。走るのが苦手なメンバーもいるが、それはほかのクラスも同じだろう。練習は楽しかった。このまま本番の日が来なければいいと思うほどだ。

60

中島まほりが、図書館でジャイアント馬場の写真をコピーして持ってきてくれた。動物ではなく、赤いパンツのプロレスラーだった。目や雰囲気、ジャイアントパンダに似ていなくもない。今度は動いているところを見てみたい。

いよいよ体育大会がせまってきた。あと三日、僕はプレッシャーによる腹痛、頭痛、そのほかいろんな苦しみと闘うのだ。母親の奇声をあげる応援もいやだ。ビデオに撮られるのもそう。ただ、中島まほりからバトンをもらって、僕がビリになったりしたら、彼女にわるい。いや、彼女は僕が失敗したからといって責めたり笑ったりしないことはわかっている。だからなお更、勝って彼女に喜んでもらいたい。

65

(中略)

いつもは最前列に陣取る母親の姿が見えない。今年は来ないつもりだろうか。

雲がaアツいおかげで、炎天下の辛さからまぬがれた。去年の体育大会は死ぬかと思うほど暑かった。母親が兜のような黒い帽子を被り、サングラスに黒の長い手袋をはめて、奇声をあげて応援するので、戦国もブショウの幻を見ているのかと思ったほどだ。

70

今日、僕は二〇メートル走では一位だった。でも、あれほど練習したクラス対抗リレーは最下位になった。

中島まほりの前までは二位くらいで来ていた。いい位置で僕にバトンがきて、トップを狙えると思っていた。中島まほりにバトンを渡すやつが焦ったのだ。ほんの少し彼女の手のひらの位置にcトドかなかった。バトンが落ち、それをdヒロおうとしてしゃがんだところに、C組の太った男が飛び込んできて中島まほりを突き飛ばした。それでもすぐに立ちあがってバトンの落ちている場所を探し、それをつかんで走り出すまでが素早かった。ものすごく運動神経が良いひとなのだと確信できた。

75

なのに、デブのそいつが大声を張り上げたのだ。「そのバトン、うちのだろ」と。

彼女のせいじゃないのだから、バトンを間違えていたって、そのまま走ればよかったのだ。でも、中島まほりはそのまま走らなかった。それもそうだ。彼女は中島まほりだ。もとの場所までもどり、デブのあとの走者にバトンを渡し、自分の黄色いバトンを離れたところまでひろいに行き、最下位になって僕のところまで走ってきた。

80

かなり差がついていた。僕は中島まほりのために何人か抜かそうと思ったが、どんなに力を振り絞っても追いつけないまま最下位でゴールした。

85

終わってから中島まほりは僕の顔を見ようとせず、応援席にもどるときにも、もどってからもずっと下を向いていて頬や耳を赤くしていた。だれも彼女に声をかけず、ひとりであうつむているので、僕も話しかけられないでいた。

バトンを受け取るときに、ひとこと言えばよかった。「大丈夫だよ」だとか「よくがんばったね」だとか。僕はばかだから、むつつりとしたままバトンを受け取った。きつと怒っているように見えただろう。

「夏見君」

クラス代表のメガネの女子が僕をよぶ。

90 「ごめん、言ってなかった。このあと逆転チャンス競技っていうのがあってね、夏見君が推薦^{すいせん}されたの。早く行って」
推薦したのが山上なのは明らかだ。早くと急^せかされていやだとも言えず集合場所に向かった。何をするのかもわからなかったが、前の走者を見ているとグラウンド中央に並んだ紙をひろい、中を見て、あちこちに走り、靴やらハチマキやらを手にしてまた走っている。借り物競走というやつだ。

95 ゴールテープを持つ係には、中島まほりが入っている。元氣のない細い肩^{かた}でぼんやり立ち、胸の真ん中にあてて持っているゴールテープすら重そうだ。

僕はスタートしてから一番に紙を開いた。書いてあることを理解するまで少し時間がかかった。誰かに訊いてみなくては。なんのことを書いてあるのか、誰かに確認^{かくにん}しなくては。視線をあげると、ゴールテープを持った中島まほりがこちらを見ている。僕はまだ借り物をしていないのにゴールに向かった。

「ねえ、中島さん」

息をきらして言うと、中島まほりはテープを持つ手をきゅつと握^{にぎ}って硬^{かた}くなった。

「イボウシってなに？ カエル？」

借り物が書いてある紙を差し出した。

中島まほりが覗^{のぞ}きこむ。

「え、これ……」

「赤の、イボウシだって」

彼女は一瞬^{いつしゆん} B 目をまるくして、

105 「これ、赤いボウシ……」と、消え入りそうな声で言った。

「え、赤いボウシなの？ 僕、赤いボウシかと思った」

「カエル？」

「ほら、イボガエルとかウシガエルとか」

「赤ガエルとか？」

「うん」

110 中島まほりはふちの赤くなっていた目を細くして、テープを持っていないほうの手で口もとをおさえ、「くっ」と声をあげて笑った。そして、僕の目を見ながら肩をゆらし、からだを前へ折り曲げた。

「借り物に、カエルなんて、ないよね」

115 本当は赤いボウシと、何とか読めていた。最初に見たときにカエルのことかと一瞬思っただけで、そのあとすぐに帽子と書いてあるのだとわかった。でも、僕のこの、おぼか頭を使えば、中島まほりと話せるかとも思った。こんな頭でも計算はわりと速いんだ。

僕がずっとゴールしないのをクラスのやつらが気づいて叫^{さけ}んでいる。

「なにやってんだよー」

山上の声だ。借り物競走のことを思い出した。

「あそこ」

120 中島まほりが指さす先に朱色^{しゆいろ}のツバ広帽子が見えた。保護者席の後ろのほうに見えるそれを目指して走った。

近寄ると見覚えのある細長い体型だ。母親だった。黒ずくめの e フクソウに朱色のエプロンをつけ、同じ色の帽子を被^{かぶ}っている。 P T A の腕章^{わんしょう}が見えるので、係の仕事をしていたのだろう。

「貸してね」

125 帽子をはぎ取ると母親は目と口をぽかんとあけた。油断した顔が子どもみたいで面白^{おもしろ}かった。それを自分の頭に被るとすぐに引き返した。

ほかのひとはもうとつくにゴールしている。焦らずいつもの速さで走り、ビリでテープをきった。テープを持つ中島まほりと目があつた。口をおさえてまだ笑っている。

130 僕はグラウンドの真ん中まで走っていき、両手で一番をつくり高く掲^かげ、飛びあがった。かなり高く、カエルみたいに。自分で考えた勝利のポーズだ。着地したときに尻^{しり}もちをついて転がった。

山上が大きな声で「ばーか」とツッコみをいれてくれた。

応援席から笑い声があがり、中島まほりの口元に白い歯がのぞいた。

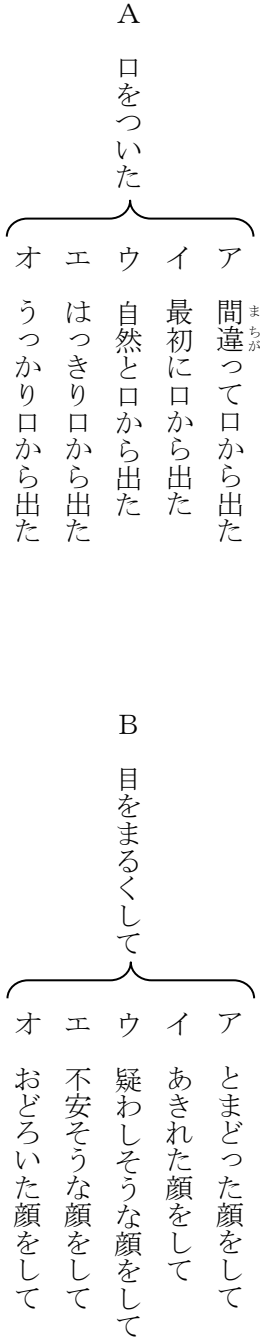
③それが僕の、僕だけの宝物に見えた。

(神田茜^{かんだあかね}「ぼくの守る星」より)

- *1 夏見親方：この日の登校時、校門前で転びそうになってふんばった「僕」の姿が力士のように見えたため、「僕」は「夏見親方」と呼ばれている。
- *2 結びの一番：相撲すもうでその日の最後の取り組みのこと。ここではリレーのアンカーのことを言っている。
- *3 山上：「僕」のクラスメート。
- *4 ジャイアントババ：体の大きなプロレスラー。前日の授業時に「僕」は足のサイズを突然聞かれ、間違えて三十六センチと大きめに答えてしまったため、先生から「お前はジャイアント馬場ばばか」と言われたが、「僕」はジャイアントババが何なのか分らなかった。

問1 〓線部 a ～ e のカタカナを漢字に直さない。

問2 ー線部 A・B のここでの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問3 ー線部①「僕は手をあげて辞退しようと思っていたのに」とありますが、なぜ「僕」は辞退しようと思っていたのですか。六十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問4 ー線部②「またこんな言い間違いだ」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 中島まほりには「僕」の話を真剣しんけんに訊いてももらえなかったのに、油断していつもはしないような言い間違いをしてしまったと気のゆるみを反省している。

イ ずっと気になっていたジャイアントババのことをようやく知ることができたはずだったのに、初めて話す中島まほりに緊張きんちょうして簡単な言い間違いをして落ち込こんでいる。

ウ リレーのバトンを受け取る者として中島まほりと仲良くなっておこうと思ったところなのに、誰だって気づくような言い間違いをしてしまったっていらだっている。

エ 中島まほりと初めて話して、彼女になら素直すなおに訊きたいことが訊けるのに、なぜ自分でもすぐに気づくような言い間違いをしてしまったのかとあきれている。

オ 一度ゆつくりと話したいと思っていた中島まほりと、ようやく二人きりになれた機会なのに、落ち着いていれば気づくような言い間違いをしてしまい焦っている。

問5 ー線部③「それが僕の、僕だけの宝物に見えた」とありますが、この時の「僕」の気持ちを百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問6 本文の内容に関する説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「変わらぬ丸い目で領き」(39行目)、「両はしが垂れ下がった目だ。」(51行目)という表現から、「僕」は中島まほりのことをかわいいパンダに重ね合わせて見ていることが感じとれる。

イ 「陣取る」(68行目)、「兜のような黒い帽子を被り」(69行目)、「奇声をあげて」(70行目)という表現から、「僕」が母親の熱心な応援ぶりを異様なものとして見ていることが感じとれる。

ウ 「それもそうだ。彼女は中島まほりだ。」(78行目)という表現は、丁寧^{ていねい}に理由を説明している表現ではないが、「僕」が中島まほりの性格を理解しその行動に納得^{なつとく}している様子が感じとれる。

エ 「かなり高く、カエルみたいに。」(128行目)という表現は、「赤いボウシ」をカエルと間違えたことをふまえたものであり、「僕」のうれしさがこみ上げてきた様子が感じとれる。

オ 「「ばーか」とツツコみをいれてくれた。」(130行目)という表現は、山上から強い言い方をされても、「僕」は山上を決して悪いやつとはとらえていないことが感じとれる。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ルールを変えるために戦うことは、人々に多大な犠牲^{ぎせい}を強^しいることになります。それは、一時的に世の中に大きな混乱を a マネくことになるからです。それでもルールを変えなければならないときがあるからこそ、人々は立ち上がるわけです。しかし、それならみんなが一つのルールに適応してしまった方が、いろいろと楽なのではないでしょうか。そうすれば、社会に混乱も起こらないし、戦いが起こることもありません。なぜ、世の中はそうならないのでしょうか。

①このような考え方に異を唱えた人物がいます。ドイツ出身で、アメリカで活躍^{かつやく}した政治思想家である、ハンナ・アーレントです。もしもすべての人が一つのルールに適応してしまったら、世の中はどうなるのでしょうか。アーレントによれば、そこでは誰も^{だれ}が同じように考え、同じように行動し、同じような生き方をする世界になってしまいます。多様性は失われ、社会は画一的になってしまいます。彼女はそれを、すべての人々が「一人の人間」になってしまふ、という b ジタイ^{ジタイ}として説明しています。

「一、事実として、このような世界は決して成立しません。なぜなら、人間は誰もが異なる存在であり、この世界に一人として同じ人間は存在しないからです。アーレントは、そのようにこの世界に存在する人間が多様であるという性質を、「複数性」と呼んでいます。

人間は、複数性をもつからこそ、かけがえのない存在であり、他者には置き換^かえることのできない個性を持っています。それは同時に、人間は誰もが前例のない存在であるということ、二この世界に初めて生まれてきた存在である、ということでもあるのです。ここからアーレントは、人間がこの世界に生まれてくるということを、世界に新しい始まりをもたらす出来事として説明しています。「私」とまったく同じように考え、行動し、生きる人間は、この地球上において、ただ一人として存在しません。三、「私」には、これまでの人々が誰も想像しなかったことを、誰も考えもせず、行動することもなかったことを、新しく始めることができるのです。人間が複数性をもっている、ということは、この世界では誰もが新しく何かを始めることができる、ということです。だからこそ、私たちには社会のルールを変更^{へんこう}することができるし、また新しいルールを作り出すこともできます。それが、アーレントの考える人間の条件なのです。

それに対して、ルールの変更を認めず、すべての人々を一つのルールで縛^{しば}ろうとすることは、こうした人間の複数性の否定に他なりません。そのように画一化された世界で、人間は個性を奪^{うば}われ、誰^{だれ}とでも交換^{こうかん}可能な存在へと *1 貶^{おとし}められてしまいます。ルールに反逆しようとする人は、その存在を否定されてしまうのです。

アーレントは、このように、一つのルールで人間を支配しようとする社会のあり方を、「全体主義」と呼びます。その事例として彼女によって挙げられるのが、第二次世界大戦中のドイツです。当時のドイツでは、*2 ナチスと呼ばれる独裁政権が国を支配しており、国家を批判する人は強制収容所に連れていかれ、*3 虐殺^{じゅくさく}されました。そこでは、国民には国家が正しいと認めるただ一つのルールだけが押し付けられ、人々の複数性、意見の多様性が踏^ふみにじられていたのです。

一つのルールですべての人間を納得^{なつとく}させることなんてできない。もしもそれができたら、人間は一つのルールでカバーできてしまうような、単一の存在になってしまふ。それに対して、人間には複数性が備わっていて、誰もが他者と異なる存在であり、今まで考えられなかったような新しいことを始めることができる。私たちには、どんなときでも、既存^{きぜん}のルールに異を唱え、それを c サツシン^{さつしん}することができ。だから、人間はルールに反逆する——アーレントはそうように考えました。

もちろん、ルールへの反逆を一人で行うことはできません。*4 フランス革命がそうであったように、そのためには多くの人々が力を合わせ、一緒に行動^{いっしょ}しなければならぬのです。アーレントは、そうした人間の複数性^{もじ}に基づく行動を「②活動」と呼びました。

活動が複数性に d ネザすからこそ、それは、新しく何かを始めることを意味します。そしてそうした活動に携わっているとき、私たちは、他の誰とも交換不可能な人間として、かけがえのない個人として、自らの姿を現すのです。しかし、そうであるからこそ、活動は常に予測不可能な営みでもあります。なぜなら、それに参加する人間は、誰もが前例のない存在だからであり、そこで起こることもまた、前例のない出来事の連続になるからです。そのため活動はそもそもコントロールが困難なものであるのです。

したがって、多くの場合、反逆は当初の予想とまったく異なる e キケツを迎えることになります。フランス革命が起こる前、革命を計画していた人々は、その最中で残酷な事件の数々が起きるとは、思いもしなかったのではないのでしょうか。しかし、一度革命が始まってしまったら、その行く末を意のままに操ることなど、誰にもできません。革命がどんな *5 顛末を辿るかを予測できた人など、一人として存在しなかったはずです。

だから、活動は常に、「こんなはずではなかった」ということの連続になります。それは失敗に終わるかもしれませんが、そうでなくても、多くの犠牲をもたらすかもしれません。アーレントは、全体主義の *6 脅威に対して、活動の重要性を訴えました。ただし彼女は、ただそれを樂觀視していたのではありません。活動は、人間の自由を守る最後の砦でありながらも、まさに *7 ユーゴーが「悲惨な人々（レ・ミゼラブル）」と呼んだような、不幸に見舞われる人々を作り出してしまいかもしれないのです。

しかし、だからといって、私たちには何もできないわけではありません。アーレントは、活動が予測不可能であるからこそ、特別に重要になる要素があると言います。③それは、「約束」です。

約束などというと、何を生ぬるいことを言っているのだ、と思われるかもしれませんが。仲間に約束したことなんかよりも、社会で正義とされるルールの方が、優先順位が高いように思われるかもしれません。

しかし、アーレントはそうは考えません。なぜなら、他者に約束することだけが、人々の活動が新しい出来事を引き起こしていく中で、その予測不可能性を制御する力を持つからです。もちろんその力は万能ではありません。約束したところで、それが破られることもあるでしょう。しかし、約束することなしに、活動を望ましい方向へと導くための、道筋を構想することはできません。だからこそ、約束を交わすこと、そして約束を守ることが、特別な重要性をもつのです。

そうであるとしたら、約束を守ることが、社会のなかの正義よりも、ずっと大切だと考えることさえできるかもしれません。なぜなら社会の正義は変わりうるからです。正義が変更され、不安定になるとき、活動が暴走しないために、約束は必要不可欠なのです。あるいはこう言ってもいいかもしれません。約束は、社会の正義を変えることを、既存のルールに反逆することを、望ましい仕方で実現するための、欠かすことのできない条件だと。だから私たちは、他者との約束を特別に尊重しなければならない、と。

(戸谷洋志「悪いことはなぜ楽しいのか」より)

*1 貶められて…劣ったものとして見下されて。

*2 ナチス…一九三三年から一九四五年までドイツを統一した政党の略称。代表ヒトラーのもと、厳しいルールと差別で多くの人を苦しめた。

*3 虐殺…むごたらしい手段で殺すこと。

*4 フランス革命…十八世紀後半に起きた市民革命運動。

*5 顛末…事の始まりから終わりまでのありさま。

*6 脅威…力によっておびやかしおどすこと。

*7 ユーゴー…十九世紀に活躍したフランスの詩人・小説家。後の「悲惨な人々（レ・ミゼラブル）」の作者。

問1 ――線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2

一
二

 に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい(ただし、同じ記号は二度使えません)。

ア つまり イ なぜなら ウ だからこそ エ たとえば オ しかし

問3 ――線部①「このような考え方に異を唱えた人物がいます」とありますが、「ハンナ・アーレント」はなぜ「このような考え方に異を唱えた」のですか。解答欄に示された言葉に続けて、それぞれ三十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

ハンナ・アーレントは、

という考え方に対して、

と問題視したから。

問4 ―線部②「活動」とありますが、筆者は「ハンナ・アーレント」が「活動」と呼んだ行動のことをどのように考えているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「活動」とは、人々が考えをすり合わせながら全ての人に納得がいくルールを作り出すことであり、平等で平和な社会を実現することにつながるが、逆に人々の自由を奪ってしまう危険性もあると考えている。
- イ 「活動」とは、人々が個性を持ち寄り自分たちを取り巻くルールを作り変えようとすることであり、社会をその時の正しい方向に導くことができるが、その過程で人々に多大な犠牲を強いる深刻な側面もあると考えている。
- ウ 「活動」とは、多様な意見を認め合い協力して今までにないルールを作り出すことであり、社会がより豊かになるために必要なことだが、一つやり方を間違えると意見がぶつかりあい、紛争にまで発展する恐れがあると考えている。
- エ 「活動」とは、人々が今の社会に不満を感じて現行のルールを徹底的に壊そうとすることであり、争いのない社会を目指すことだが、その過程で逆に多くの悲惨な人を生み出してしまふ深刻な側面もあると考えている。
- オ 「活動」とは、一人の優秀な人物のもとで意見をまとめ新しいルールを作り出すこととすることであり、人々の自由を奪う全体主義に対抗することも可能だが、逆に独裁者を生みだしてしまう危険性もあると考えている。

問5 ―線部③「それは、「約束」です」とありますが、筆者は「約束」をどのようなものだと考えていますか。百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問6 本文の内容に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ハンナ・アーレントは、すべての人々が「一人の人間」になることで、誰も考えなかったことが新しく始まると考えている。
- イ ナチスは全体主義の象徴であり、ドイツを一つのルールで統一しようとし、人々は何の疑問も持たずにナチスに従った。
- ウ フランス革命は、市民一人ひとりが革命の結末を明確に想像し、自分たちの望む形にしようと努力したことで成功した。
- エ 「活動」は前例のない出来事の連続であるため、フランス革命では誰にも予測できないような被害がたくさん出てしまった。
- オ 社会の正義であるルールは、人々の意見から生まれるため、約束より優先すべきだとハンナ・アーレントは考えている。

三、次の――線部と似た意味をもつ熟語を、後の語群からそれぞれ一つずつ選び、漢字に直して答えなさい。

- 1 彼らがひそかに考えた悪たくみを見み抜く。
- 2 受験勉強を一緒にがんばった彼は私の同志だ。
- 3 各国の首脳が良好な関係を保つために努力している。
- 4 あの人の判断にはかたよりがない。
- 5 あたえられた任務を言われた通りにまじめに行う。

(語群)

コウヘイ ・ メイユウ ・ チュウジツ ・ シンゼン ・ カンパ